英語教材としての文学作品の可能性

ーヘミングウェイ作品の場合ー

A Study of Using Literary Works as Teaching Materials for English
– Hemingway's Case –

横浜国立大学 非常勤講師
関戸冬彦

キーワード：ヘミングウェイ、教材、授業方法
Keywords: Hemingway, Teaching Materials, Teaching Methods

Abstract

This study discusses using Ernest Hemingway's works as teaching materials in English classrooms. First of all, it will introduce the current situation of using literature in English classrooms in Japanese universities and prior research related to this topic. Next, a practical strategy and procedure, including detailed class activities, for using Hemingway's short stories will be introduced. Finally, the need for creating new teaching materials using Hemingway's works will be presented.

はじめに

2008 年 12 月に東京女子大学にて行われた日本ヘミングウェイ協会第 19 回全国大会のシンポジウムタイトルは「ヘミングウェイを教室で教えるー『日はまた昇る』の場合ー」であった。その際に、「教室で教える」とは作品を「文学教材として教える」のか、「英語教材として教える」のか、どちらなのであろうか、というひとつの疑問を抱いた。シンポジウムの内容は前者であったが、実は筆者の期待は後者にあった。そこで本稿ではその期待に自らが応えるべく、ヘミングウェイ作品を主に大学の語学としての英語の授業内で、昨今の文学教材に対する英語教育界からの逆風の中においてあえて英語教材として使うにはどうしたらよいのか、また今後の可能性を望むならばどのようなことが考えられうるのか、といった点を筆者自らが行った授業実践報告と共に紹介、考察していきたい。

1.　昨今の英語教育の流れ　ー　現場での経験から　ー

まず一般論としての昨今の英語教育界の流れを確認しておく。改めて言うまでもなく、

現在の大学の英語の授業では、文学部、中でも英文科や英米文学科を除いては、英語で書かれた文学作品を教材として使用することはあまり好ましく思われていない。むしろ、文学作品を教室で取り上げること自体が敬遠され、使用を極力避けるように、あるいは教科書として指定しないように、ということが暗黙の了解として、あるいははっきりとしたガイドラインとして、ある。いまや、文学作品を扱わないこと、テキストとして使用しないこと、が教員間の常識のようにさえなりつつある。しかしここで一旦立ち止まって、なぜ文学作品を教材にしてはいけないのかと考え始めると、実はそれは結構難しい問題になる。

それは文学作品を英語の授業で読ませることの「何が」いけなのかという問題をも喚起する。この問いへの明確な答えはあるのだろうか。あるいは、他の視点、文学作品は英語・英文学専攻以外の学生には単語が難しすぎるから避けなければならないのか。単語が簡単ならば英文の理解も簡単かというと必ずしもそうではない。例えば、It is that that is that which I want to say. を学生に「高校生にもわかるように簡潔にこの文を説明しろ」というと即座に文法的に解説できる学生はほとんどいない。[1]こうした理由を幾つかあげて多角的に考えてみると、文学作品を使用してはいけない理由は実は曖昧であるように思える。

次に考えられる批判は、文学作品を扱った授業のやり方、扱い方がいけなのではないだろうか、という点である。例えば、全員同じテキストの同じページをあけ、一人一人順番に当てて答えさせ、ほかの当たらない学生は寝ている、そして順番に当てるので当たらない日は授業に来ない、といった状況への批判である。しかも授業内容は難しい文学作品の英文を日本語に訳すだけ、試験でも授業で扱ったところを出すので訳文を闇雲に暗記、もしくは翻訳があるならそれを入手し該当部分を暗記するのが試験対策、となれば当然、英語教育ではなく暗記のための暗記力教育と批判されても仕方がない。

しかし、文学作品以外の教材を使ってさえいればこういう状況が許されるわけでもない。つまり、「文学作品を教材として扱うな」という裏には、一字一句訳すだけの旧態然とした工夫のない授業、という考えがあり、そうした授業は好ましくないという警告に思える。逆に言えば、積極的に英語学習に取り組める教材、授業方法であれば、その素材は文学作品か否かは問題にならないであろう。要は対象の学生のレベルに見あった適切な教材を使用すべき、ということになるのだろう。では、これらの状況を勘案した際に、ヘミングウェイ作品はそうした「適切な英語教材」になりうるのか、という点を次に考察する。

[1] 説明の一例としては、「元の文は That is what I want to say.（それが私の言いたいことです。）であるが、その主語(that)が強調構文(It is …that)によってはさまれ、かつ what が同じ機能を果たす that which に置き換えられているので that が３つも含まれている。意味としては、『私の言いたいことはまさにそれなのです！』、となる。」など。

2. 教材としてのヘミングウェイ作品　ー　先行研究など

2-1　学会と既存の大学英語教科書

日本英文学会関東支部英語教育部門ではこうした昨今の文学作品の使用衰退の状況を憂い、文学作品を教育に生かすためのワークショップがさかんに行われている。なかでも2010 年５月の例会では日本ヘミングウェイ協会会員である山本洋平と田村恵里による、「雨の中の猫」(“Cat in the Rain,” 1925)を授業でどう扱うか、のセッションが行われた。その際彼らはこの作品が教材として扱われている大学英語教科書を紹介、また参加者自身らがこの作品を授業で扱うとしたらどのように扱うのか、これまでどのように扱ってきたのか､をレポートとして準備してきた上でのディスカッションを行った｡その際に山本が、なぜ「雨の中の猫」なのか、という問いを立て、それに対し語彙のレベル、長さ、展開、議論のしやすさなどから見て教材として適切なのではないかと回答している｡[2]また他の参加者からも同様の意見が聞かれた。つまり、英語が語彙や文法、構文の観点から見た際に大学 1,2 年生にとってやさしく、長さとしても短いもので、かつストーリーの展開が面白いものというのは教材になりやすいという結論であった。

事実、当日に紹介された、三修社から 2004 年に出版された『大学英語演習　リーディング＆リスニング　what it’s about』には「雨の中の猫」が２章にわたって掲載されている｡ほかの作品に関しては朝日出版社の『愛の諸相』に「北ミシガンで」(“Up in Michigan,” 1925)が収録されており、これには短篇の全文が掲載、内容把握の問題がついている。

2-2　文体論としての研究対象

こうした日本の教材作成事情とは別に、ヘミングウェイ作品を言語学的な研究対象、特に文体論として分析した論文もある。先の「雨の中の猫」に関しては、日本では東大出版会から出ている『文学の方法』の中で斎藤兆史が「テクストと文体」という項目のもとに文体論の検証例として解説をしている。この論文では英文をよりよく理解するための手がかりとしての文体論の解説を試み、その具体例として「雨の中の猫」を用いている。もちろん、文体論に言及したからといって即英語教育的アプローチとは言えないだろう。しかし文章を読んで字義通り解釈して終わりなのか、それともその先まで考えてみるのか、は文学的かつ教育的問いであるのと同時にどの深さまで英語の授業として英文を追求するのか、という考察点をも示唆している。

海外のものではロナルド･カーター(Ronald Carter)の論文､“Style and interpretation in Hemingway's 'Cat in the rain'”, 1982 がある。斎藤によるとマイケル・スタッブ(Michael Stubbs)の“Stir until the plot thickens”, 1982 という論文もあるが、この論文はカーターの論文と共にアンソニー・ジェニングス(Anthony Jennings)の論文、“Against Stylistics”,

[2] 当日の詳細は以下のウェブサイトに議事録して掲載されている。
http:// www.elsj.org/gakushu/_userdata/2.pdf

1989 の中で仮説の立て方に問題があるとして厳しく批判されているという。教材ではなく教室、という言葉からはロバート・スコールズ(Robert E. Scholes)の『テクストの読み方と教え方：ヘミングウェイ・SF・現代思想』(*Textual power：literary theory and the teaching of English*, 1985)における、『われらの時代』(*In Our Time*, 1925)の間章（第 7 章）を用いた「教室の中のテクスト」が連想されるが、スコールズの場合は文体論以上に文学自体をいかに教えるかに力点がおかれているので、英語力向上の観点から見た場合には英語の授業のやり方としての参考にはならない。ポール・シンプソン(Paul Simpson)は *Language through Literature* の“Exploring narrative style: patterns of cohesion in a short story”, 1997 において、スコールズと同様に『われらの時代』の間章（第 5 章）を用いて文章の整合性を論じている。間章をピリオドごとの一文一文に区切り、それをランダムに並べて提示し、作品を読んだことのない学生に並べ替え完成させてみるという実験のもとに書かれた実践報告的な論文である。それによると、学生が言語的に適切になるようにと代名詞などの手がかりを探しながら並べ替えたとしても、オリジナルのようにはならない、という点を指摘している。

このように、ヘミングウェイの作品、特に短編、は言語学的な研究対象としても扱われてきた。これらの論文の数が他の作家を対象とした文体論研究と比べて多いのか、それとも同等なのかどうかは別途詳細な研究が必要ではあるが、文学作品の英文を解釈する以上の次元へと導いているという点において、ヘミングウェイ作品に見られるユニークさが文体論研究者の目をひいてきたことは確かであると言えるだろう。

3. 授業実践例　ー　どう使ったのか？

では執筆者の授業実践例を紹介する。流れとしては主にシンプソンの論文で紹介されている活動を踏襲しつつ、具体的クラスとしては Writing の授業（１年生クラス）で使用した。本活動はナラティブ的な書き方を教える際の応用演習として行った。ここでヘミングウェイ作品（シンプソンの論文、活動）を用いた理由はナラティヴすなわち物語文にはいろいろな種類のものがあり、それを実際に検証してみようという狙いがあったからである。実際にこの活動に用いた時間は 1 授業内、約 45 分であった。以下にその手順を紹介する。

3-1　並べかえ用の用紙を配布

まずは論文中に紹介されている並べ替えの部分を A５サイズの紙にコピーして配布する。

(a) All the shutters of the hospital were nailed shut.

(b) When they fired the first volley he was sitting down in the water with his head on his knees.

(c) There were pools of water in the courtyard.

(d) They tried to hold him up against the wall but he sat down in a puddle of water.

(e) One of the ministers was sick with typhoid.
(f) Two soldiers carried him downstairs and out into the rain.
(g) There were wet dead leaves on the paving of the courtyard.
(h) Finally the officer told the soldiers it was no good trying to make him stand up.
(i) They shot the six cabinet ministers at half past six in the morning against the wall of a hospital.
(j) It rained hard.
(k) The other five stood very quietly against the wall. (Simpson, 104)

3-2　個人、グループで順序を検討

最初は個人で 10 分弱考え、自分なりの正しいと思える順序を整えてもらう。その後、４～６人で１グループを作るよう指示し、グループとしての共通の答えを話し合って考えるように伝える。最初は制限時間 15 分といって始めさせるが、学生たちはグループ内での議論に夢中になっていくので結果として大抵 25 分近くかかる。こうしたグループ活動の利点は、学生たちが夢中になって英文を読むようになることである。

3-3　クラスで答えを比較

議論し疲れた頃合いを見て、グループのリーダーを決めてもらい、そのリーダーは黒板に自分のグループの答えを書く。そして、各グループが出した答えを全員で比べてみる。以下はそうした議論の末に出された、黒板に書かれたよくある回答例である。

回答例１　(j) (c) (i) (a) (e) (k) (b) (d) (h) (f) (g)
回答例２　(j) (i) (c) (g) (e) (a) (f) (k) (b) (h) (d)

これらからわかるように、先頭を(j)とするグループが圧倒的に多く、基本的にその時点で全員オリジナルとは異なる見解を示したことになる。

3-4　論文の回答例と比較

その後、論文にある２つの例（ひとつは論文中の学生グループのサンプル、もうひとつはオリジナル）を掲載したプリントを配布する。

学生サンプル　(i) They shot the six cabinet ministers at half past six in the morning against the wall of a hospital. (j) It rained hard. (e) One of the ministers was sick with typhoid. (f) Two soldiers carried him downstairs and out into the rain. (d) They tried to hold him up against the wall but he sat down in a puddle of water. (g) There were wet dead leaves on the paving of the courtyard. (k) The other five stood very quietly against the wall. (h) Finally the officer told the soldiers it was no good trying to make him stand up. (b) When they fired the first volley he was sitting down in the water with his

head on his knees. (c) There were pools of water in the courtyard. (a) All the shutters of the hospital were nailed shut. (Simpson, 110)

オリジナル　(i) They shot the six cabinet ministers at half past six in the morning against the wall of a hospital. (c) There were pools of water in the courtyard. (g) There were wet dead leaves on the paving of the courtyard. (j) It rained hard. (a) All the shutters of the hospital were nailed shut. (e) One of the ministers was sick with typhoid. (f) Two soldiers carried him downstairs and out into the rain. (d) They tried to hold him up against the wall but he sat down in a puddle of water. (k) The other five stood very quietly against the wall. (h) Finally the officer told the soldiers it was no good trying to make him stand up. (b) When they fired the first volley he was sitting down in the water with his head on his knees. (Simpson, 112-113)

数分読む時間を与えた後、今度はどちらがオリジナルかを予想してもらう。これは二択なので、適当に答える学生も含め、意見は大抵半々程度に分かれる。その後正解を発表し、あわせて日本語訳を紹介する。

3-5　正解発表後の活動

最後に、この作品の作者は誰か、と問う。ヒントして、アメリカの作家、と言うのだが、シェイクスピアや夏目漱石といった珍回答となることが多い。「正解はヘミングウェイ」というと、「あぁ」という反応になる。その反応から察するにヘミングウェイという名前そのものは認知度が高い。実はヘミングウェイという名前は作家や作品以外にも使われることがあり、例えば、歌手・今井美樹は「太陽とヘミングウェイ」というアルバムを発表、全日本空輸（ANA）の CM では俳優・本木雅弘の写真の脇に「ヘミングウェイだったら何ていうだろう？」というキャッチコピーが書かれるなど、文学とは別のきっかけで知っていたのかもしれない。

3-6　実践を通して

授業実践はここまでで、これ以上授業内にて作品の解釈などは行わない。この実践では、まずナラティヴというスタイルの紹介、その一例としての文学作品の存在を紹介、そしてそれを実際に読み考えることを体感する、ということがポイントであった。学生たちの並べ替えの手順と見ていると、常日頃は意識していないかもしれないが、論理的に考えようとしていることがよくわかる。おそらくそれは、高校までの英語教育、例えばセンター試験での並べ替え問題など、においてこうした問題を解く際は必ず論理、指示代名詞や接続詞の整合性、をもとにして回答するよう学んできたからであろうし、それは当然正しいやり方である。

よって、この作品のようにそうした論理で成り立っていない文章を並べ替えろと問うこ

と自体が無理なのかもしれないが、そうではない文章も存在することを示すことは決して無意味なことではない。また、この作品で並べ替えをさせたのにはもう一つ理由がある。例えば、宿題としてこの短編を読ませても、おそらく読まないだろうし、読んだところで大して興味も持たないであろう。しかし、このように並べ替えさせ、かつグループで議論させることにより、何度も本文を読み考えているので、結果としてそれは自発的に精読していることになる。学生の様子を見ていても、意味を考えようと競うように辞書を引くし、自分の考えがいかに正しいか説得しようとする者もいる。また、最後に２つのサンプルを比較することで再度読み返し、どちらが正しいか内容を考え、議論することになる。

このように、切り口はある種のライティングの書き方を知ることだが、その過程において自然な精読を伴うという、ライティングとリーディングの相乗効果を狙った活動としてヘミングウェイ作品の教材としての使用を試みたのである。

4. 今後考えられうる教材化　―　どうすれば使えるのか？

最後に、今後ヘミングウェイ作品を英語教材として用いるための幾つかの提案をしたい。要点は「アプローチを変える」、すなわち原書をそのまま読ませ訳させるだけが作品の教材としての価値や教育の方法ではない、にある。例えば、プレゼンテーション形式でストーリーテリングのように作家、作品の紹介をする、などは十分スピーキングの授業に取り入れられる。また、同様の方法でライティングの授業でも使える。ただし、素材がヘミングウェイでなければならない理由はないので、こちらからサンプルの一例として示す、候補のひとつにする、が限度であろう。リーディングの授業では、先の「雨の中の猫」の際に言及したように、英語がやさしく、短く、かつストーリーが面白いものならば、学生からも歓迎される。それは近年台頭してきている Graded Readers を使った多読ともつながる。しかし残念ながら、ヘミングウェイ作品の Graded Readers は現時点では存在しない。[3]しかし、海外の学習補助サイトなどでは作品の要約や概要を紹介したものがあるので、先の作品を簡単な英文で紹介するという活動にあたっては十分に資料として活用できるし、そうした英文自体を速読教材として取り上げることも活動として考えられうる。

また、Timed Reading という英語教材がある。これは 400 ワードで書かれた英文を読み、その時間（制限時間は４分間が目安）を記録し本文を読み返さず 10 問の設問に答えるという教材である。その中には Timed Reading in Literature という文学作品限定のシリーズもあるが、取り扱っているマグロウヒル社によると、Graded Readers とほぼ同じ理由により残念ながらヘミングウェイ作品はシリーズ 10 巻中の全 500 題の中に１つも取り上

[3] 2010 年現在没後 50 年を経過していないということもあり、著作権問題の関係で不可能になっていると思われる。マクミランＵＫにヘミングウェイ作品の Graded Readers の有無を確認した際の回答は“I’m afraid the Hemmingway estate always decline all offers to adapt his work – hence no Reader.”だった。

げられていないという。しかし、このような教材を参考に独自のリーディングテキストを作ることは可能であろう。

リスニングならばオーディオブックでのリスニング活動が考えられる。iTunes などでダウンロード用に販売されているものあれば、ペンギンブックスのように本と CD のセットもあるので、音声ファイルと朗読されているオリジナルテキストさえ入手できれば、リスニングの選択問題やディクテーションのプリントを作ることは通常の教材作成と同様のプロセスとなり、そう特別難しくもない。

よってこれらを統合、吟味すればヘミングウェイ作品を扱った英語教材集も作成されうる。もちろん著作権の問題もあるが、教室で扱うプリントとして、あくまで教育のための素材加工であるのならば、著作権侵害には当たらないだろう。大切な点はよい教材を作ってよい授業をし、学生の英語学習への興味を喚起することであり、その素材が奇遇にもヘミングウェイ作品であるならば､それは作品の新たな価値をも見出すことになると言える。

おわりに

本稿では昨今の英語教育の流れを概観したあと、ヘミングウェイ作品を用いたワークショップや研究を検証、そして執筆者の実践例を紹介した。また今後の教材化に向けての提案をすることでその可能性についても言及した。現在の大学英語教育における、ある種の縛りの中であえてヘミングウェイ作品を教材という視点から見ることで、もしかしたら個々の作品の、あるいはヘミングウェイという作家全体の、新たな価値を、英語教材化を通してあわせて発見することが出来るかもしれない。

参考文献

Carter, Ronald (1982). Style and interpretation in Hemingway's 'Cat in the rain' In R. Carter (Ed.), *Language and Literature : an introductory reader in stylistics* (pp.65-80). London: G. Allen & Unwin : Unwin Hyman.

Simpson, Paul (1997). *Language through Literature.* New York: Routledge.

斎藤兆史(1996).「テクストと文体」川本皓嗣, 小林康夫編『文学の方法』東京大学出版会